あなたしか見えていません

高岡由実
秋田県・一八・高校生

好きになった時から、未来も希望も一ミリも見当たりません。百パーセント実らないこの恋を、いつまで続ければいいんだろうって毎日毎日悩んで、毎日毎日あなたに恋をしていたら、二年半も過ぎてしまいました。「大好きな人がいるから」なんて言って、どんな誘いも紹介も全部断って、高校生らしい恋愛もせずに、過ごしてきてしまいました。きっと春になって私がいなくなれば、あのクッキーの味も私の字も、猫の絵の色も靴下に詰め込んだ愛も、あなたは忘れてしまうのでしょうね。できれば少しずつ、思い出にして下さい。あなたの優しさしか知らない私を、あなたを想って一時間立ち尽くす私を、思い出の一つにして下さい。私は大人になる前に、この片思いを押し流して、他の誰かに恋をしなければならないのです。そうしないと、結婚して優しいお母さんになる私の夢が、一生叶えられないのですから。だからお別れの手紙のつもりなんです。でも、どんどんあなたの声が、足が、靴音が、笑顔が、浮かんできては消えないのです。

私が今まで見聞きしてきた量は、あなたのそれの足下にも及びませんが、無知ではありません。しかもこれを書いている今でも、あなたしか見えていませんが、視野が狭いわけではありません。本当は、すべてを忘れて私のこと一分間だけ、大好きになってもらいたかった。あの時、あなたはどんな想いで、私の絵の前で立ち止まってくれたのですか。私の絵を見て、何を思いましたか。

「あなた」なんて書いてごめんなさい。いつかまた会うことができたなら、一年生の頃のように、何事もなかったかのように私におはようって言って下さい。あの真っ赤なポロシャツを着て、私を切なくして下さい。大好きです。あなたを想うことが生きる意味でした。さようなら、先生。

＊四十歳のあの人が、私の高校生活のすべてでした。